

心情表現と衣裳の記述

——物語『夜の寢覚』原作と改作対比して——

平安後期の時代に成立した物語『夜の寢覚』は、鎌倉時代末期もしくは室町初期になって、その改作本を見るに至った。改作本の改作態度を検討するとき、主題の変更・系図的改変の問題はともかくとして、そこには一般的に見られる原作本の簡略化・平易化といった現象がある。本稿では、複雑な心情表現や衣裳描写に対する簡略化及び省略について、両本を逐一対照しながら考察する。原作本の本文は日本古典文学大系本を用い、改作本は鎌倉時代物語集成本を用いた、例文については上段に原作本、下段には該当する部分の改作本を掲げる。傍線は筆者の附したものである。

第一章 心情表現の簡略化と省略

まず複雑な心情表現の簡略化及び省略について、その例を挙げます。出産を控えた中の君の衰弱した様子と描いた部分であるが。

①あたらしく惜しげなるさまは、鬼神、武士といふとも、涙おとさぬ

はあるまじきを、まいて夢のやうにて、たゞひと目ほのめきよりて、月比を経て、かぎりなく思ひしめて恋ひ思す中の、かゝる折をしも見奉り給御心地、なのめなら

んやは。(原作本・巻二二二五頁)
「このまま死なせてしまうわけにはいかない、まことに惜しい中の君のご様子は、鬼神や武士といえども、同情の涙を流さない者はないだろう。」下段には該当する部分がありません。つまり見舞いに来た大納言の哀切な心情表現の部分が、改作本では省略されている。

唐

娜

引き続き、中の君をかきくどく大納言の言葉部分であるが。

②「あが君や、などかくつらう、い
みじき契はおはしける。もの覚え
てのち、めぐらひ侍に、心にのこ
る事もなく、思なやむ事なかり
つ。いかなる契にかありけむ、ひ
と目見奉りてしのち、心魂もしづ
まるときなく、夜は、つゆまどろ
む時なくなげき明かし、昼は、ひ
ぐらし思ひくらすよりほかの事も
おぼえざりつるに、終に例のさま
にて、いまひとたび対面せでわか
れ奉りなば、かたとき、たち後れ
てあるべきにもあらず。よし、人
も見聞き給へ。われも人も、はか

「かくていかにもなり給なば、かたと
きたちとまりてあるべきにも侍らず。
よし、たれも見き、給へ。はかなきよ
を、とてもかくても侍りなん。たづね
き、いだしてのち、なにとてつ、み
は、かりすごしつらん。心のま、にこ
そ、いてかくしつべかりけれ」。(改
作本・巻二二三五六頁)

なかりける世を、たづね聞き奉りても、あぢきなく人目をつゝみはかりて、などてすこしつらむ。心のまゝに乱れたちてこそ、いづくへも率て奉るべかりけれ」。(「原作本・巻二 二二六頁」)

「わが君よ、どうしてこうつらく悲しいご縁でいらつしやるのか。私は、物心ついて後、世を過して来た今日まで、何一つ心残りなこともなければ、思い悩むこともありませんでした。あなたに一目お目にかかって以来、心も魂も休まる時がなく、夜は、一睡とてする時なく嘆き明かし、昼は、日がな一日あなたのことを思い暮らすこと以外に、ほかの事は考えもしなかったのに。」最初の縁を結んで以来、これまで大納言がどれほど思い悩んできたか、その心中の苦しみをこまやかに述べる個所だが、その前半部分(傍線の個所)が改作本では省略されている。

引き続き、関白邸で成長する石山の姫君に対する大納言北の方の嫉妬、それに対する大納言の反発する心中を描く個所であるが。

③あなたうち見やられて、まづ物ぞ 記載なし。(「改作本・巻二」)

あはれなる。かくのみやすげなく
思しうらみたる気色なれど、「な
どかくおぼすべき。あまたか、づ
らひ通ふは、世のつねの男の、さ
るなをくしき際こそ、かゝる筋
をかく思なれ、ふさはしからず」
など思せば。(「原作本・巻二 二一四

八頁)

石山の姫君が大納言の両親のもとに引き取られると、彼の気持ちはどうしようもなくヒロイン中の君に向けられ、また初孫を得た関白家の喜びも大きく、五十日の祝宴が盛大に催される。妻の大君としては、今までも夫の様子に不安を拭いきれな

つたのが、いよいよ疑心が募り、身の宿世のつらさへの嘆きとなり、夫への態度もおのずからすげなくならざるをえない。それに対して、大納言は、弁解かたがたの慰めの言葉を繰り返すが、内心では、

「どうしてそうお考えなのだろう。何人もの女に関係して通うのは、男なら世間普通のこと、自分の低い女たちこそこうした筋のことを嫉妬するものなのだ。大君のご身分にはふさわしくない」

と、相手を非難して、自分の行動を正当化しようとする。こうした大納言の心理分析に重要な個所が改作本では完全に省略されている。

引き続き、中の君の心根を讃える大納言が、妻大君を手厳しく批判する長文の個所であるが。

④「女は、見なれぬかぎりこそあれ、いふかひなくなりぬれば、いかゞはせんに思なり、あるまじく便なきことにても、しのびて心をかはず、みな世のつねのことなり。されど、わがたづね出でたりしに、もて隠さむかたなく、わりなかりけるにしのびかね、姫君の御事ばかりこそ言ひしらせ、ゆづりとらせたれ、その程ばかりの言葉、かよふことにてありけむ。それよりほかの世のつねの筋は、さりぬべきおりくゝ、もの情なくもてなし、かけはなれてのみこそあれ。うつたえに、われを『見ず聞かじ』とは、よも思はじを『たゞ、かくえさらず、聞きにく

「わが心の、あまりに人ににずして、こゝろざしにまかせて一すぢにみだれなば、をんなの御ためいとふびんなり。よにとかくいふとも、おほとのは、とがにおほすべきにあらず。子あるかたにこそつき給べけれども、あまりのなさけのゆへに、こゝろからかゝる事もきくぞ」とおぼしつゞけて。(「改作本・巻二」三七一頁)

き筋をいみじくはゞかり、つゝむにこそあめれ』と思へば、げにつらかりける契のほどを、おなじくはひと筋ならざりけるをうらみつゝも、堪えがたく、しづめがたき心を、あながちに思ひけち、もてしづめて、人目やすきほどに、なだらかにもてなしてこそ、我もしのびすぐせ。言ひの、しるばかりのふしやはある。わが忍びあまる寢覚のおりくの気色ばかりは、『さなめり』と心得給ふとも、なだらかにもてけちて、人目のためにも、聞きにくかるべきこととは制し聞きいれ給はで、しのびて我をうらみ給はむこそ、世のつねの事なれ。男ならんからに、聞きにくき名を、はゞからぬ様やある。あきたく、心憂げにも言ひの、しりたる、かくめづらかにもあるかな。我なればこそ、いとあながちに思しのびて、人しれぬ心をもくだけ、おもひのま、ならむ人は、かくもしのぶまじきを、え絶ゆまじき契もあるを、もて出でてたづねより、たゞあらはしにあらはれましかば、いかゞはせまし。この御身こそいとをしく、中

空にならましか。かしこき人も、女のすぢになりぬれば、世のもどきたどり思はず。大殿も、かく聞き給ひては、『子ある宿世こそ』とて、いかばかりか、もてさはぎ給はまし。あながちに、『あしきこと』とも、よも制する人もあるまじけれど、げにたゞ見そめしありさま、ゆくりなく、あはつけきやうなれば、そのもとの心をしのびつゝ、女方の、いみじく怖ぢはゞかり給てあとを絶つに、われもくるしくおぼえて、あながちに忍びすぐすこそ、我ながら、ありがたきことなれ。かくしのびくのはて、あの御ためこそ、言ひくは、あぢきなけれ、この御身は、なぞ憂はしきふしなるぞ。われも人も、いみじく所を置きて、つゝみはゞかる、本意なく」と思しつゞけて。(『原作本・巻二』一五九頁)

「二度関係を持てば、道にはずれた恋でも、男と交際を続けるのが世間一般の女だというのに、つれなく振舞う中の君だが、私も見苦しくなく思いしづめて我慢しながら過している。あまりに大君がいい騒ぐのならば、すべてを明るみに出してしまおうか。父関白も子の生まれた縁こそ大切になさるだろう。」と、大君を批判する大納言だが、その内容は巧みな自己弁護ともいえよう。それにしても、そこにこそ大納言という人物造型に対する作者の苦心の跡がみられるのだが、改作本では、

あまりに記述が短く、切角の原作の味わいが大幅に減じられている。

以上の四点からも、原作における大納言の人物造型、つまり中の君との道ならぬ恋を正当化すべく、また強烈な嫉妬に身をこがす大君への嫌悪感など、微に入り細に入りその心理分析に徹しようとする原作者の意図が、改作本では大きく減殺され、ありきたりな平板な描写に変えられてしまっている。心理分析のよくいきとどいた「女の一生の物語」という大前提に立つとき、改作本の記述は余りに平凡な描写になった。

第二章 衣裳描写に対する簡略化と省略

続いて衣裳描写の簡略化及び省略について、その例を挙げます。こうした中でも時は流れ、新春が巡って来る。華やかな装いをこらした家内一同が集って、賀詞が交換されるが、その場面で衣裳の描写が著しく記した部分ですが。

①御帳・御几帳、みな紅梅の織物にて、女房も、そのいろ／＼各かず
御方のしつらひ。(改作本「三四三頁」)

しらずかさね着て、表衣も各おなじいろの織物なる、五重襲の唐衣、萌黄の三重の裳、童、掻練の相に、紅梅の織物の五重の汗衫、萌黄の織物の上の袴、思ふことなく心地よげにもてなすも、ことはりなり。かぎりなくかしづきたてられて出で給ふ男君のめでたき、きよげなるにほひ、もの思ひわすれ、老もしぞくばかりなるを、大臣君も「見るかひあり。うれし」

と、見奉り給ふ。(原作本「八八頁」)

原作本は、正月一日に、中納言の御方では、内外に人々が寄り集うて、華やか

に、賑々しく見えた。女房たちも、その同じ紅梅襲の袷を濃い色薄い色おのおの数知らず重ね着して、表着もそれぞれ同じ色の織物で、五重襲の唐衣、萌黄色の三重の裳をつけて晴姿、童は、掻練の相に、紅梅の織物の五重の汗衫、萌黄色の織物の上袴という衣装で、何の屈託もなく楽しげに振る舞っているのも、麗々しさを写したものである。改作本では省略されていますが、とても惜しいです。

②女房たち、童の、色どももとの、
はず、紅梅・梅・柳・桜・山吹・
薄色・蘇芳・紅などをうちまぜて
本「三四三頁」

ひと色づ、裳・唐衣ところ／＼
をかしく仕立てて、あまた参りた

れど、かくのみおはします御あり
さまなれば、けふとても心地よげ

ならず。(原作本「八九頁」)

原作本は、中の君の御方では、女房や童が、衣裳の色も揃わず、紅梅、梅、柳、桜、山吹、薄色、蘇芳、紅などを取り交ぜて、一色ずつ、裳、唐衣など一人一人気のきいたさまに装って、大勢集ってはいたが。改作本では省略されていますが、以上の二つ例を比較すると、物語は第五年に入る。中の君十七歳、大君二十二歳。めでたき婿君を得て明るく。賑わう大君の周辺、それにひきかえ、姫君の病臥に閑散と静まりかえる中の君側。大君方が新春らしく衣裳や調度の色を揃えて装っているのに、中の君方は女房や童の装束が、春の色ではあるが不揃いであるなど、対照的に描かれている。

③紅の御衣八ばかり、かげ見ゆばかり
りなるうへに、桜の五重なる御
衣、萌黄の小桂、物よりことにつ
たまふに。(改作本・巻二「三四三頁」)

高く、あてに、きよげに、御髪、

いろなるかたによりて、こま／＼

とさはらかに清らにて、桂の裾に

ゆる／＼とおはす。「これこそは、

かぎりなき人の御さまなれ」と、

見るに〔原作本・巻一〕八九頁)

原作本は、紅の御衣を八枚ほど重ねて輝くばかりの上に、桜の五重の御衣、萌黄の小桂をお召しになった北の方の姿は、際立つて気高く、蕩たけて、美しく、御髪は艶やかな漆黒で、毛筋は細かくさらさらと美しく、桂の裾の方にゆったりとかかっている。改作本では省略されています。

④ 姫君の、床よりおりて、ひきつく

ろふともなくうちとけて、御衣ば

かり奉りかへたる、紅梅の八つば

かり、萌黄の小桂、袖口・裾のつ

ままで、たをくとなまめかし

着なし給て、はなくとにほひみ

ちたりし御かたちのかはるまで、

面やせ給にたれば。あてに、心ぐ

るしげなるを。〔原作本・巻一〕八

九頁)

原作本は、紅梅襲の桂を八枚ほどに、萌黄の小桂を、袖口、裾の襷まで、たおやかに品よく着こなされて、これまでで艶やかに匂いこぼれるばかりであった美しいお顔が見違えるまでに、面瘦せておしまいになった。改作本では省略されています。姉と妹の対照は、当然その容姿に及ぶ。大君は「気高く」「あてに」「きよげ」、中の君は「はなばなとにほひみちたりし」平生の美が病苦に面瘦せながら、なお「あてに」「らうたげさ」が添うとしるされる。「にはひ」「らうたさ」が女主人公の理想美の基本である。

引き続き、大納言が姫君の引き取りに対する準備を調える個所である。

⑤ 姫君の御むつき・御おしく、みな

ど、なべてならず清げにしたて

て、薫物たきしめて、姫君に湯な

どあむせ奉る。中将君も、人しれ

ずさ、めきいとみ給。藤の衣六

ばかりに、紅のうちたる、青朽葉

の織物の桂、撫子の唐衣、薄色の

裳、宿直物にしろき唐綾の桂五、

女房二人、童一人、下仕・はした

もの清げなるなど、めやすき程に

したてて、わたし給ふ。少将君は

御送りに参る。唐撫子の衣五ばか

り、藤の織物の桂・若楓の唐衣、

裳はおなじ薄色、扇なども心ある

さま也。中将君用意せさせたり。

〔原作本・巻二〕一三九頁)

原作本は、姫君の御産着やおくるみなど、ひとかたならず美しく調べて、香をたき込み、姫君にお湯などつかわせる。乳母の衣裳は、藤襲の着物六枚ばかりに、紅色の打って艶を出した打衣、青朽葉の織物の表着、撫子の唐衣、それに薄紫の裳と、いういでたち、宿直用には白い唐綾の桂を五枚用意し、女房二人、童一人、下仕え、召使のこぎれいな者など、また、少将の君の衣裳は唐撫子の着物五枚ばかりに、藤の織物の桂、若楓の唐衣をつけ、裳は乳母と同じ薄紫で、扇なども気がきいている。衣裳の描写が詳しく述べている。ここにも改作原作者の簡略化しようとする意図が見えるように思われる。

以上、原作と改作対照しながら心情表現や衣裳描写に対する簡略化及び省略について考察してきた。これまでの考察結果からも明らかのように、この物語には、全体的に簡略化・平易化をはかるための改変がいたるところに見られ、ことに複雑な心情表現や衣裳描写の削除・圧縮はいちじるしい。また、原作本の悲恋物語が改作本では幸福な結末を持つ短い物語へとかえられていることにもこうした傾向がどのように関連づけ得るのか、今後さらに詳しく分析してゆきたいと思えます。

(1) 注

原作本『夜の寢覚』本文の引用は、鈴木一雄校注、新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年九月発行。

(2) 改作本『夜の寢覚』本文の引用は、市古貞次、三角洋一校注。鎌倉時代物語集成、笠間書院、一九九三年五月発行。